

## 英国における日本語教育の再考

### —異文化理解をめぐる学習者及び日本語教師の意識調査から—

オックスフォード・ブルックス大学 藤野華子

オックスフォード大学 萩原順子

オックスフォード大学 西澤芳織

リーズ大学 森本一樹

リーズ大学 大枝由佳

#### 1. 異文化間コミュニケーション能力

世界のグローバル化に伴い、以前にも増して異なる文化や価値観を持つ人々が共生するようになり、外国語教育では単に言語を的確に使えるだけでなく、相手の文化を理解し、自己の文化との違いを受け入れる能力、つまり異文化間コミュニケーション能力（intercultural communicative competence, ICC）が求められるようになった（Byram *et al.*, 2013）。本稿では Byram（1997）のモデル（図 1）に基づいて ICC を捉える。

	<b>Skills</b> interpret and relate ( <i>savoir comprendre</i> )	
<b>Knowledge</b> of self and other; of interaction: individual and societal ( <i>savoirs</i> )	<b>Education</b> political education critical cultural awareness ( <i>savoir s'engager</i> )	<b>Attitude</b> relativising self valuing other ( <i>savoir être</i> )
	<b>Skills</b> discover and/or interact ( <i>savoir apprendre/faire</i> )	

図 1: Intercultural Communicative Competence (ICC) model (Byram 1997:34)

Byram（1997:49-54）によれば、ICC は「態度（Attitude）」「知識（Knowledge）」「解釈・関連付けするスキル（Skills of interpreting and relating）」「発見・インターアクションのスキル（Skills of discovery and interaction）」「教育（Education）」の 5 つの要素から構成されるという。「態度」とは、異なる文化に触れた時相手

を尊重して異文化を理解しようとする態度のことであり、相手の立場から自文化を見つめ直すことができる能力である。異文化間話者（Intercultural Speakers）は異文化に対し好奇心にあふれており、偏見を持たず寛容な立場を取ることができる。ここでいう「態度」にはポジティブなものもネガティブなものも含まれるが、Byram（1997）は「単なる経験集めの観光客的な態度、ビジネスにおける利益を得るための興味とは区別すべきだ（*ibid*: 50）」と述べている。「知識」とは、個人が持っている自文化・異文化に関する知識のことであり、この知識は学校教育や家庭で得ることもできるし、実際に交流することで得ることもできる。「解釈・解釈するスキル」は異文化に関する文書（テレビ番組、観光案内、教科書など）や出来事を解釈し、自文化と関連付けすることができる能力である。異文化間話者は文書を異なる視点から分析することができ、他文化に関して誤解があれば、なぜそれが起こったのか自文化・他文化の知識から関連付けることができる。このスキルは異文化を理解し、自文化と他文化の関係性を見出すことができる能力である。「発見・インターアクションのスキル」は持っている知識をさらに深めるためのスキルである。目標文化に関する新しい発見、そして、実際のコミュニケーションでインターアクションしながら既に持っている知識を異文化と関連付けることのできる能力である。「教育」は、明示的な基準をもって自文化及び他文化を批判的に評価できる能力のことである。

最近では、英国の高等教育においても、人の移動が頻繁になり、かつ世界情勢が不安定な中であって、異文化に対する寛容性や関心の高い人材を育てるための教育がますます強く望まれるようになった（Bothwell, 2016）。その一方で先行研究（Byram *et al.*, 2013）では、ICC の養成をカリキュラムに取り入れた言語教育の実践はまだ少ないと言われている。そこで英国の日本語教育における ICC に対する意識およびその養成の実態を把握すべく調査に臨んだ。

## 2. 調査

### 2.1 調査対象

本調査の対象は英国の大学で学ぶ日本語学習者及び英国で教えている日本語教師である。学習者に関しては、学習目標や学習経験など対象者の背景をある程度統一させるため、日本に留学経験のある日本語専攻（二科目専攻を含む）の大学学部生に限った。その結果、7 大学 38 人の学生が任意で調査に参加した。38 人の男女

比率は、女性 26 人 (68.4%)、男性 12 人 (31.6%) で、国籍、出身はイギリス人 (複数国籍を含む) が 34 人 (89.5%)、EU 諸国出身者が 2 人 (5.3%)、その他の国、地域出身者が 2 人 (5.3%) である。

一方、日本語教師に関しては、より多くの声を拾うため、現在英国で教えていること以外には特に条件を求めず、大学での専攻科目として日本語を教えている教師の他、選択科目として日本語を教えている教師や中等教育、個人指導などで教えている方も含めて参加を募った結果 34 人の協力が得られた。

## 2.2 調査方法と内容

2017 年 3 月 6 日から 4 月 3 日にかけて学習者と教師に対してそれぞれ別のオンラインアンケート調査を実施した。アンケートは選択式及び記述式を採用し、記述の部分に関しては出来るだけ詳細なコメントを求めた。アンケートはいずれも回答者の意識や内省に焦点を当て、学習者については、日本語学習の動機、異文化理解、自己の文化的アイデンティティ等 (質問数 11 項目) を、教師に対しては、ICC 養成を意識した教育実践、イギリスで日本語教育を行う意義と社会への貢献、学習者の動機、教師自身の動機等 (質問数 8 項目) を尋ねた。なお、分析方法等の詳細に関しては後章にて説明する。

## 3. 学習者からの回答、分析

学習者から得られた回答のうち、本稿では特に異文化理解に関わる二つの質問に焦点を当て、それに対する回答の分析を試みた。第一の質問、即ち「あなたは異文化への寛容性が高いと思いますか。」(Do you think that your tolerance of acceptance of other cultures is high?) に対して、「そう思う」が 32 人で全体の 84.2%を占め、「そう思わない」(2 人、5.1%)、「よく分からない」(4 人、10.3%) はいずれも少数であった。さらに、第二の「日本語学習の経験はあなたの異文化への寛容性に肯定的または否定的な影響を与えましたか。」(Do you think that your experience of learning Japanese has affected the level of your tolerance or acceptance of other cultures either positively or negatively) という質問に関しても、「そう思う」との回答が 25 人 (65.8%) で圧倒的に多く、「そう思わない」(7 人、18.4%)、「よく分からない」(6 人、15.8%) を大きく上回った。なお、後者の質問に関しては否定的影響も含まれる可能性があるが、得られた 27 のコメントは「外見に対する偏見を持った相手に対しては以前より不寛

容になった」というコメントを除いて全てが肯定的変化について述べており、日本語学習によって自身の異文化理解や寛容性が高まったと感じている学習者が多いことが分かった。

次に、上記の両質問に関して得られたコメントを Byram (1997) の ICC モデルに照らし合わせ分析を行った。合計 60 のコメントの内、ICC モデルの項目に最低一つ以上当てはまると考えられるものが 51 で、全体の 85%であった。なお、二つ以上の項目に当てはまるコメントも 12 含まれるため、コメントの述べ総数は 63 であった。

項目の中で最も多く見られたのが「態度 (Attitude)」と「知識 (Knowledge)」で、コメント数はそれぞれ 24 であった。まず「態度」に関しては、異文化に対して敬意を示し、対等な関係での交流を求めたり、相手の立場に立つとするコメントが多数見られた。また、文化背景に対する関心の強さも窺えた。

- (1) *“As I want to be respected as a person whose identity is the product of many cultures, I feel inclined to respect others without being judgmental, but instead curiosity as to why certain people live certain ways of life.”*

一方で、異文化に対して興味・関心は示しているものの、ICC の要件にはやや満たないと思われるコメントもいくつか散見された。

- (2) *“Cultural variety is fascinating to me (...) If I don't like the country's culture, I can simply leave and I don't think they should have to accommodate me.”*

次に、「知識」に関しては、自己の寛容性の高さ（低さ）の根拠として、家族や育った環境を挙げている例が非常に多かった。

- (3) *“I grew up surrounded by people from many countries and my family is multicultural.”*

- (4) *“(I) grew up in a Muslim community.”*

- (5) *“..being brought up in a very working class background whereby I rarely interacted with people from other cultures”*

一方で、イギリスの大学における多様性を挙げているのは留学生に限られ、英国人の学生は「多文化コミュニティー」としての大学という点に気付いていないか、もしくは当然視していると思われる。

- (6) *“I also think that the highly cosmopolitan environment of UK universities makes it so that not being accepting is very hardly a quality you find in students here.”*

また、個人や社会といった宣言的知識以外にも、円滑な交流方法など手続き的知識も見られた。

- (7) *“Because of my experience with a number of other cultures (...) (It) has led me to meet many others of other nationalities and cultures. This has led to my tolerance having been increased over time.”*

「スキル」に関しては、「解釈・関連付けするスキル」に当てはまるコメントは見られなかったが、「発見・インターアクションのスキル」に分類されたコメントが 11 見られた。成育環境もしくは日本留学によって身につけた知識を活用し、他国や他文化理解に繋げたり、より一般的な異文化理解の方法を習得したりしていることが窺えた。

- (8) *“It has allowed me to understand Japanese rational, and through understanding the reasons follows acceptance. It has also allowed me to use the same tactics when engaging with cultures other than the Japanese.”*

最後に、「教育」に関しては 4 つのコメントに限られ、明確な客観的基準に基づいて自文化および異文化を評価できている下記のようなコメントは少なかった。

- (9) *“We are all brought up in different societies with different values- as long as the beliefs are peaceful, and as long as people do not try to forcefully change other people's beliefs, then there is no reason not to accept them.”*

#### 4. 教師からの回答、分析

教師から得られた回答には二つの大きな傾向が見られた。一つは、日本語教育により日本語・日本文化の知識・スキルが身につくだけでなく、ICC の要素の涵養を含む様々な教育効果ももたらされるというコメントが多く見られたことである。このようなコメントは、回答者 34 名中 28 名 (82.4%) の「イギリスで日本語教育を行う意義と社会への貢献」や「教師自身の日本語教育に対する動機」に対する自由記述の回答の中で見られた。また、教室内の多言語・多文化環境に触れた回答も散見された (9 名、26.5%)。これらの回答から、教師は英国の大学の「多文化コミュニティ」としての側面に対する意識が高く、それが学習者の ICC の養成に役立っていると認識していることが窺える。(10) から (13) は教師からのコメントの例である。

- (10) *“他の国の文化や人々を尊重し、広い視野で物事を理解できるようになるので、社会人としてとても良い見本となることができる。” (T16)*

- (11) *“日本語を学習する過程で、学生が国や民族を超えた偏見のない広い視野を持ち、さらにそれが友人や*

家族にも広がることで、近年世界各地で見られる単一民族思想や民族差別の暴走の抑止になる（と信じたい）。” (T28)

(12) “私が[勤める]大学では海外からの留学生が多いため、言語や文化の多様性についてより深く知ること  
で、彼らの将来の活躍の場が出身国であっても世界であっても、国際感覚をもって働けるようになるのでは  
ないかと思っています。” (T17)

(13) “いわゆる語学学習をする・クラスメートと協働で何かをするという点で、*transferable skills* が[身に]着く  
ものと思われる。それが「社会貢献」に結びつくかは分からないが、少なくとも、社会に出て役に立つスキル  
を身に着ける実践をしているのではないかと感じる。” (T3)

その一方で、実際に「多言語・多文化を意識した日本語教育を行っているか」という質問に対しては、回答にやや消極的な傾向が見られた。「はい」と答えた教師は 14 名（41%）、「どちらともいえない」が 18 名（53%）、「いいえ」が 2 名（6%）だった。「はい」と答えた教師にその実践例を尋ねたところ、「日本と自国の文化を比較させる」（10 コメント）か、もしくは「多国籍の学生からなる教室内で各学生の経験を共有する」（8 コメント）かのどちらかの活動例を挙げるにとどまり、文化比較・意見の共有を超えて学習者自身の内省を促すような活動例を含む回答、つまり、Byram（1997）で言うところの ICC の「教育」の要素を意識した実践例は得られなかった。（14）はその一例である。

(14) “クラスが多国籍の学生で構成されているので、日本の文化、習慣を授業で取り上げる場合は必ず学生  
たちの国における同様の文化、習慣と比較して発言、ディスカッションする。” (T28)

「どちらともいえない・いいえ」と回答した理由としては、「コース目標ではないから」（8 コメント、例 15）、「カリキュラムに余裕がない」（3 コメント）「（実践したいが）教師間で共有見解が得られていない」（3 コメント）など（例 16）が挙げられて、興味はあっても各教育機関の事情により実践に至らないというジレンマが窺えた。

(15) “主義としてなるべくその方向で教えたいが、学期内に教科書の文法事項などを終わらすことでいっぱいになりがちだから。” (T33)

(16) “コースのシラバスにそのような記述がなく、教員の間でも特にそのような意識共有がなされていないため  
です。” (T17)

## 5. まとめと今後の課題

以上の結果から、教師はすでに多文化コミュニティーである英国の学習環境の恩恵を感じるとともに ICC を重要なものと捉えており、学生に日本と自国の文化を比較させたり、教室で学生の経験を共有させたりする形で ICC を育む機会を設けていることが分かった。一方で学習者は、自分が生まれ育った環境のおかげで自己の異文化に対する寛容性が高いと認識している場合が多く、日本語を学習することでその寛容性がさらに高まったと感じていることが分かった。このように英国の日本語教育現場は、環境も学習者も ICC の涵養に適した好条件が揃っているわけだが、本調査で把握できた範囲では、教室で文化比較や意見の共有を超えて学習者自身の内省を促すような活動は見られず、Byram *et al.* (2013)で述べられているように、英国の日本語教育でも ICC の養成をカリキュラムに取り入れた言語教育の実践はまだ遅れていることが窺われた。実際、学習者の ICC を Byram (1997)のモデルにおける5つの要素で分析してみた結果では「態度」と「知識」に該当するものが圧倒的に多かった。学習者は、日常的に多様な文化に触れ、日本への留学経験を通じて異文化理解について様々なことを感じたと思われるが、ICC に対する自己認識においては偏っていることが窺われた。

今後の課題として、まず ICC の養成をより体系的に授業に取り入れ、特に学習者が留学を通じて実感する意識の変化を扱っていくことが挙げられる。そして、それと同時にイギリス国内、教室内にすでに存在する多文化・多言語環境をより意識づけ、積極的に活用していくことよってより継続的な ICC の養成が実現されると思われる。尚、本研究はオンラインのアンケート調査に留まったが、回答についてより詳しく知り、より深い考察を行うにはインタビュー調査や長期的に学習者の意識の変化を追うことが必要と思われる。

---

## 参考文献

- Behrnd, V. & S. Porzelt (2012). Intercultural competence and training outcomes of students with experiences abroad. *International Journal of Intercultural Relations* 36, 213-223.
- Bothwell, E. (2016, July 5). International student mobility 'even more important' post EU vote: Referendum result is a

'wake up call' for UK universities on their relationship with the rest of Europe, conference hears. *Times Higher Education*. Retrieved June 17<sup>th</sup>, 2017 from <https://www.timeshighereducation.com>

Byram, M. (1997). *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*. Multilingual Matters.

Byram, M., P. Holmes & N. Savvides (2013). Intercultural communicative competence in foreign language education: Questions of theory, practice and research. *The Language Learning Journal* 41:3, 251-253.